

# 知的障害特別支援学校に子どもを送迎している 家族等の実態及び通学にかかわる負担感・ニーズ

○伊藤琢也                      佐島毅  
(川崎市総合教育センター)      (筑波大学人間系)  
KEY WORDS: 知的障害特別支援学校 通学支援 負担感

## 【目的】

近年、スクールバスによる特別支援学校への通学にかかわる状況は変化し、様々な課題が生じている。藤原（2009）は、「学校への送迎に対する悩みや負担感が高いことや、通学は保護者の当然の責任であるとする立場は、制度制定以来全く揺らいでいない」と批判している。中野（2016）は、「通学にかかわる福祉と教育のサービスの狭間の問題が生じている」ことや、「通学支援のために、家族の社会参加、特に、母親の社会参加への影響が生じていること」を明らかにした。しかし、障害のある子どもの通学にかかわる課題は、これまでほとんど研究されていない。そこで、本研究では特別支援学校に子どもを送迎している家族等の実態調査を実施し、中野（2016）の調査で十分に検討されなかった「家族等の負担感」の要因を明らかにするとともに、通学にかかわるニーズを検証することを目的とした。

なお、本研究は筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得ている（課題番号第東 2020-8 号）。

## 【方法】

### 1 予備的調査（第 1 研究）の方法

特別支援学校（知的障害または肢体不自由部門）に通学する子どもの家族等 6 名を対象とし、インタビュー調査を実施した（調査期間は 202X-1 年 6 月 X 日から 7 月 X 日）。分析方法は、User-Local テキストマイニングを用い、単語の頻出度を把握した。また、谷・芦田（2009）を参考に 4 層のコード化を行い、本調査の質問紙の項目群を特定した。

### 2 本調査（第 2 研究）の方法

全国の知的障害特別支援学校 625 校の PTA 会長ならびに役員及び知的障害特別支援学校小学部・中学部・高等部に在籍している子どもの家族等で、主に送迎をしている者を対象としアンケート調査を実施した（調査期間は 202X-1 年 8 月 X 日から 10 月 X 日）。

分析は、まず基本統計量から全体的な傾向を把握した。次に、アンケート調査の質問項目から、「負担感」を従属変数とし、独立変数を「基本属性」「送迎の実態」「家族等の環境やニーズ」の 3 点に着目し、 $\chi^2$  検定及び残差分析（Haberman（1974））による 16 の仮説検証を行った。

## 【結果】

### 1 予備的調査（第 1 研究）の結果

テキストマイニングによる分析では、研究協力者の 6 名の「放課後等デイサービス」の頻出度が高位であった。コーディングの結果では、逐語録より抽出された合計 160 のキーワードについて、コードを 6 区分に選定した。インタビュー中に話された話題の割合は、「1 自宅から学校までの送迎」が平均 43.8%で最も高く、続いて「2 学校から自宅または放課後の活動場所への送迎」が 17.3%、「4 教育と福祉の役割」が 12.6%、「6 家族等の送迎にかかわるニーズ」が 10.7%、「3 家族等の状況と仕事との両立」が 9.6%、「5 送迎で感じること」が 5.9%であった。

### 2 本調査（第 2 研究）の結果

アンケート調査で収集された 1,149 件のうち、合計 1,142

件を研究対象とした。従属変数を「負担感」とした  $\chi^2$  検定を実施した（Table 1）。

Table 1  $\chi^2$  検定の結果（概要）

独立変数	$\chi^2$	df	P 値	Cramer's V
所属学部	20.531***	4	.001	.095
肢体不自由の有無	7.392*	2	.05	.80
自閉症・情緒障害の有無	9.871**	2	.01	.93
療育手帳の等級	51.947***	2	.001	.151
送迎の必要度	122.181***	4	.001	.231
身体的サポート	20.211***	2	.001	.133
社会的サポート	10.269***	2	.001	.095
障害による特性	34.285***	2	.001	.173
登校時に送迎する家族等（父親）	7.456*	2	.05	.081
登校時に送迎する家族等（母親）	24.614***	2	.001	.147
登校時に送迎する家族等（その他（一人通学、通学支援、放課後等デイサービス））	79.667***	2	.001	.264
登校時に送迎する家族等の職業（専業主婦（夫）・無職）	11.452**	2	.01	.100
下校時に送迎する家族等（母親）	7.161*	2	.05	.079
下校時に送迎する家族等（その他（一人通学、通学支援、放課後等デイサービス））	6.836*	2	.05	.077
地域や職場の理解	30.342***	4	.001	.163
通学における社会経験の必要性	17.901***	4	.001	.089
地域の通学・通所支援の満足度	52.402***	4	.001	.151

\*\*\*:  $p < 0.001$ , \*\*:  $p < 0.01$ , \*:  $p < 0.05$

## 【考察】

### 1 予備的調査（第 1 研究）の考察

中野（2016）が指摘する「狭間の問題」が、依然として生じている。特に、自宅からスクールバスまでの送迎で、家族や朝の支度、通勤にかかわる時間的な制約、雨天時の対応等に苦慮している実態が明らかになった。

### 2 本調査（第 2 研究）の考察

母親の送迎への偏在傾向が明らかであり、深刻なジェンダー・ギャップが生じていることが示唆された。また、仕事や生活への影響と関連して「母親の送迎負担」にかかわる意見・要望が散見された。これは家族等のうち母親が仕事や社会参加から著しく阻害されており、藤原（2009）や中野（2016）の指摘を支持する結果となった。

家族等の送迎にかかわる負担感の要因については、子どもの障害の程度や障害種の属性、家族等の属性、登下校の方法等に加え、地域や職場の理解、地域の通学・通所支援の満足度等が関連していることが推察された。

また、負担感の要因のうち有意が認められた項目は、負担感を強化する「否定的要因」と軽減する「肯定的要因」に分類され、且つそれぞれの下位要因には、子どもや家族といった「人的要因」と通学にかかわる「社会的要因」とが、個々の実情によって複雑に関わり合って構成されていると考えられた。今後、送迎にかかわる諸課題については、地域や職場等の周囲の理解、在住する地域や所属する職場、家族を含めた尺度による横断的な研究が必要であろう。

（文献）

藤原里佐（2009）重度障害児の就学における家族の視点。教育学の研究と実践（4）, 15-21.

中野泰志（2016）「障害者の移動支援の在り方に関する実態調査に関する研究 平成 27 年度総括研究報告書」厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業。

(ITO Takuya, SASHIMA Tsuyoshi)